

中学校道徳における 多様な考えを引き出すための授業実践

学籍番号 189980
氏名 中戸 勇佑
主指導教員 庭山 和貴

1. 実践研究の背景

1.1 教科化された道徳で育成すべき力

近年、いじめをはじめとした生徒を取り巻く環境が大きく変化している。このような中で、平成25年には教育再生実行会議が、大津で起きたいじめによる自殺事件を受け、道徳の教科化を提言した。このような流れを受け、平成31年度より、中学校において、教科外活動であった「道徳の時間」は「特別の教科道徳」として教科化された。実践においては、生徒の発達段階をより一層踏まえた適切な指導が行われるような改善が求められている（文部科学省，2014）。また、道徳科の目的にもあるように、物事を広い視野から多面的・多角的に考えることが必要とされている。

以上を踏まえた上で、本実践研究を実施した実習校の実態に添いながら、多様な視点に気づかせるための方法としてユニバーサルデザインにおける視覚化を取り入れた。

1.2 本研究における視覚的な工夫

本実践研究では、道徳の授業に対するユニバーサルデザインにおける視覚化の工夫を取り入れた。特別の教科道徳への転換と共に、授業が「考え、議論する道徳」であることが求められている。そこで、多様な視点に気づかせるための発問を取り入れた実践を行った。しかし、中学生という発達段階を踏まえ、より論点が分かりやすくある必要があると考えた。そこで、多様な視点に気づかせるための「切り返し」発問を行う段階において、視覚的な工夫を行い、実践を行った。

2. 実践研究

2.1 実践研究 I

実践研究 I では、中学校第 1 学年を対象とした教材である「オーストリアのマス川」において、多様な視点への気づきを目的として学習指導の工夫と効果の検証を行った。まず、「切り返し」の発問を行うにあたり、実習校の実態を把握した。そこで見えてきた生徒の実態に合わせ、「切り返し」発問を、より効果的に活用できるように、「視覚化」の視点を取り入れた授業実践を行った。評価はアンケートにて行い、視覚化を取り入れたクラスと取り入れる以前に実践を行ったクラスを比較した。アンケートでは、目的としていた項目への回答率が、視覚化なしのクラスに比べ、視覚化ありのクラスが高くなる結果となった。一方、課題として、視覚化の定義が曖昧なまま実践を行

ったことが挙げられた。

2.2 実践研究Ⅱ

実践研究Ⅱでは、中学校第3学年を対象とした教材である「ほっちゃれ」において、実践研究Ⅰと同様に、多様な視点に気づかせることを目的として実践を行った。視覚的な工夫をより効果的にするために道徳におけるユニバーサルデザインにおける「視覚化」の視点を取り入れた。道徳の読み物教材に対する視覚化には「順接型」と「対比型」の2種類存在する(坂本, 2019)。実践研究Ⅰの視覚化は「順接型」に当てはまるが、実践研究Ⅱでは多様な視点の気づきへとつながる「対比型」の視覚化を行った。最初に実践を行ったクラスは「順接型」の視覚化を行った。しかし、実習校の先生方や、大学の指導教員のアドバイスを受け、2回目以降に授業を行ったクラスは「対比型」の視覚化を取り入れた授業を行った。評価はアンケートを用いて行い、「対比型」の視覚化を行ったクラスと「順接型」の視覚化を行ったクラスを比較した。アンケートでは、目的としていた項目への回答率が、「順接型」視覚化のクラスに比べ、「対比型」視覚化のクラスが高くなる結果となった。

2.3 実践研究Ⅲ

実践研究Ⅱでは、中学校第3学年を対象とした教材である「リクエスト」において、実践研究Ⅱと同様に、多様な視点に気づかせることを目的として実践を行った。実践研究Ⅲでは「比較型」の視覚化を取り入れた授業実践を行った。評価はアンケートを用いて行い、実践研究Ⅱと実践研究Ⅲを比較した。アンケートでは、目的としていた項目への回答率が、実践研究Ⅱに比べ、実践研究Ⅲが高くなる結果となった。また、実践研究Ⅱにおいて「順接型」視覚化を行っていたクラスが、「対比型」視覚化を行った実践研究Ⅲでは、目的としていたアンケート項目への解答率が大きく上昇し、他のクラスとの差があまり見られなかった。しかし、項目によっては解答率が低い項目もあり、この解決が今後の課題として挙げられる。また、アンケートと対比させる形でKJ法による分析も行った。

3. 総合考察

大阪市が示している3つのステップの中でも「切り返しの発問」は、議論し、考える道徳において、比較し、比べるために必要な「意見を出し尽くす」という発問のために、とても有効だと考えた。しかし、学校の抱える課題や生徒の実態に合わせて、視覚化を行うことで、より生徒が多様なものの見方で主人公に自我関与できることが見えてきた。

一つの観点から考えるだけでは、生徒にとっても退屈になるだけでなく、中学生という発達段階を考慮すると、道徳的な価値観の深い議論にはつながらない。本研究では、この切り返しの発問を、道徳のユニバーサルデザイン化という視点の「視覚化」に注目することで、目標としていた多様な見方に関する質問項目への回答率を上昇させることができたことから、今後は他の教材においても、また、他の道徳指導項目においても同じことが言えるのかについて言及したい。

また、視覚化の視点はプロンプトであるため、プロンプトフェーディングをどのように行っていくかについても課題が残った。